

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくり in ほくりく



写真 和田 日朗

「福島潟早春」

飯豊連峰と二王子岳の残雪が映える早春の福島潟。
やがて木々が芽吹き一面の菜の花で彩られる季節を迎えます。

2022 NEW YEAR

- 新年のご挨拶 ②
近藤 淳((一社)北陸地域づくり協会 理事長)
- 年頭のご挨拶 ③
岡村 次郎(国土交通省北陸地方整備局 局長)
- 随想 ④
暮らしの宿る食
横山 タカ子(料理研究家)
- 特別企画 ⑥
川と人とが描く未来図
大河津分水通水100周年・関屋分水通水50周年
今井 誠(信濃川河川事務所 所長)
小川 純子(信濃川下流河川事務所 所長)
- 特集「地域とともに」 ⑫
伝統工芸再生と産業観光
ー越中福岡の菅笠の取り組みを中心にー
安嶋 晃晴(富山大学芸術文化学部 准教授)
- シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」 ⑮
金沢がSDGsで目指す「責任ある観光」とは
永井 三岐子(国連大学 サステイナビリティ高等研究所
いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット 事務局長)
- 北陸再発見 ⑰
北陸・冬を彩るイルミネーション
- 会員だより ⑲
- 伝言板 ⑳

新年のご挨拶

(一社)北陸地域づくり協会 理事長

こんどう あつし
近藤 淳



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆さまにはおかれましては、2年続きのコロナ禍・ラニーニャ現象にあって、どのようなお正月を過ごされたでしょうか。

感染症と自然災害、歴史を見れば繰り返してきており共通点が多いと思います。疫病に対し隔離しか手段を持たなかった時代には神頼みも政(まつりごと)でした。土木の由来となった「築土構木」も「水を治めるものは国を治める」は、いずれも紀元前の言葉です。

現在では、水際対策や都市封鎖に加えワクチンや治療薬を開発したように、ダムによる洪水調節や最近では流域治水という手段も組み入れられてきました。交通分野で見れば、飛行機、新幹線、高速道路は経済成長を促した一方で、感染症の流行という意味では、その伝播スピードが格段に増したともいえます。

さて、人々の行動で見るとどうでしょう。やはり、三密、マスク、換気、県を跨ぐ移動など基本的な感染対策は自助に頼らざるを得ません。緊急事態宣言に従うにしても、日々の感染者数の増加や医療の逼迫度合いのニュースがより行動変容を促したと感じています。気象情報の収集・予測技術、それらを信頼できる情報として人々に発信することがより重要となるのではないのでしょうか。

変異株も異常気象も「災いは忘れた頃にやって来る」いや「忘れる前にやって来る」さらに「想定を超えてやって来る」と構えるべきでしょう。

ワクチンを打ってもブレイクスルー。避難所を指定したり、危険度をわかりやすく行政やマスコミが発信し実際の行動に活かす努力が継続されています。

冬用タイヤでもすり減ってれば用をなしませんし、チェーンを携行していても装着しなければ大規模な立ち往生・クラスタの発生につながります。ロックダウンならぬ通行止とする前の段階で、事前の気象予報により不要不急の外出・移動を控えることを要請し、高速道路ネットワークを活用した広域的な経路案内など、新たな工夫もその現れと言えます。

大都市と地方で災いのリスクを考えてみましょう。人口あたりの感染者数は東京、大阪が格段に多く、地方においても人口密度が高い都市ほど感染割合は高くなっています。地震や洪水でも大都市の被害は桁違いに大きくなると予測されていますし、大雪による交通の混乱は通勤・帰宅難民、物流の停滞など、首都圏の経済活動にもより大きな打撃を与えます。コロナ禍を踏まえれば、東京一極集中、過疎化問題など今一度見直す必要があると考えます。

コロナ禍にあって、「在宅勤務を初めてやった。TV会議にもなれてきた。顔を合わせる機会は減ったがせめてWEBセミナーを開催して欲しい。防災エキスパートとして活動したがDXの進展スピードが速まっている」などという会員の皆さまからの声を耳にします。

北陸地域づくり協会としても、「温故知新：長年築き上げてきた経験と知識を活かし、古いものに温もりを与え、健康年齢をできるだけ維持し、新たな知恵を生み出す」このような活動に努めてまいります。

引き続き会員の皆さまのご指導・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます、2022年が皆さまにとって良い年になりますよう、心より祈念し新年のご挨拶といたします。

年頭のご挨拶

国土交通省 北陸地方整備局長

おかむら じろう
岡村 次郎



令和4年の新しい年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人北陸地域づくり協会の会員の皆様には、平素より国土交通行政の推進に、ご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は、1月の大雪、7、8月の集中豪雨など、全国的に激甚な災害に見舞われ、防災・減災、国土強靱化が改めて注目される1年となりました。

また、昨年12月には「防災・減災、国土強靱化の推進など安全・安心の確保」を柱の一つとする経済対策として、一般会計の歳出総額およそ36兆円の令和3年度補正予算が成立しました。北陸地方整備局としても、確保した予算を令和4年度当初予算と合わせ16カ月予算として確実に執行し、早期に効果を発現していく所存です。

北陸地方整備局では、永きにわたり地域の安全・安心を守ってきた、通水100年を迎える大河津分水路や通水50年を迎える関屋分水路の節目のイベント等を通じて、社会資本の役割や使命を広く国民に知っていただく機会にしたいと考えています。

令和元年10月の台風19号により大きな被災を受けた千曲川緊急復旧について、令和3年度までに災害復旧を完了させ、引き続き信濃川水系緊急対策プロジェクトに基づき、堤防強化対策、狭窄部の河道掘削、遊水池整備など計画的に進捗を図っているところです。

また、地域経済の活性化や地域の安全・安心に向けた大規模プロジェクトについては、「大河津分水路改修事業」、日本海沿岸東北自動車道路「朝日温海道路」、「利賀ダム建設工事」、能越自動車道「輪島道路」など、事業の着実な

進捗を図ってまいります。さらには、流域治水プロジェクトの推進、インフラ老朽化対策、激甚化する災害対策、緊急時の道路ネットワーク整備（ミッシングリンクの解消）とダブルネットワークの構築を進め、地域の安全確保を図ってまいります。

建設業を取り巻く現状を踏まえると、働き方改革及び生産性向上は待ったなしの喫緊の課題です。北陸地方整備局では働き方改革を進めるため、建設業の新3K（給与、休暇、希望）の実現を目指しており、令和3年度より原則全ての工事を発注者指定型とし、週休2日に積極的に取り組んでいます。

また、建設業の生産性の向上を図るため、プレキャスト製品の更なる適用拡大、ICT人材育成推進企業認定制度の試行やICT関連表彰等制度の創設、遠隔臨場・遠隔検査の加速、検査書類の削減など、北陸地方整備局独自の新たな取り組みを進めるとともに、昨年10月に設置した「北陸地方整備局インフラDX推進本部」のもと建設分野のDXを強力に推進してまいります。

北陸地域づくり協会におかれては、災害に対する安全・安心の推進のための防災エキスパート活動や専門的知識・技術の普及・伝承のための北陸建設振興会議の活動など、北陸地方の更なる発展に貢献いただき、心から感謝申し上げます。

結びに、北陸地域づくり協会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を心からご祈念申し上げます。まして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

暮らしの宿る食

よこやま たかこ
横山 タカ子

料理研究家

長野県大町市生まれ。長野市在住。長年にわたり、信州の伝統食について、フィールドワークを含めた研究を重ね、地元の食材の良さを生かしたオリジナル・レシピを考案。全国の講演会で、「信州の長寿食」を語っている。

現在、県のおいしい信州ふード（風土）公使、伝統野菜認定委員、観光振興審議会委員、信濃大町観光大使。松本および東京・青山のNHKカルチャーセンターや銀座NAGANO、NHK「きょうの料理」各講師。また、信濃毎日新聞に「温故知らし」を連載中。「作って楽しむ」シリーズ（信濃毎日新聞社）や「健康おかず作り置き」（東京・主婦と生活社）、「信州の発酵食」（しなのき書房）など著書多数。

長野県大町市。北アルプスのふもとで生まれ、育ちも、それ以降の暮らしも県内一筋の横山タカ子です。そんな私でも、信州を知り尽くしているかと言えば、決してそうではないのです。南北に長い長野県。例えば、新潟県に近い北部地方。また、「あの山を越えると、静岡県。そして、あの峠から向こうが愛知県」と地元の方が説明してくださる南の端の天龍村。それぞれ採れるものから郷土料理まで全く異なります。南部は柚まで実り、柚餅子作りが盛んです。くり抜いた柚に小麦粉、みそ、くるみを練り込み、蒸した後、三ヶ月も干す、手間のかかる珠玉の品。昔、武士の携帯食として伝えられてきました。北部地方に住む私のあこがれの食べ物ですね。

北は、と言うと、笹寿司が郷土料理の代表でしょうか。戦国時代の武将、上杉謙信が川中島の合戦の際、越後と信州を結ぶ富倉街道を通った時に、村人が笹の葉にご飯とおかずを載せて差し出したのが笹寿司の始まりと言われ、別名「謙信寿司」とも。現代でも、とてもおいしく好まれています。

笹寿司の具は、干ししいたけにぜんまい、くるみと、昔はとてもシンプルだったとのこと。今は、卵焼きや紅しょうがが添えられ、彩りも鮮やかですが。味付けに特徴があり、何と、三年漬けた大根のみそ漬けをみじん切りにして加えます。深く漬けて発酵させた野菜を、調味

料として使った先人の発想には、学ぶことが多いですね。

さて、中信と呼ばれる地方の話をしましょう。ここには、木曾一帯も含まれます。知恵の詰まった郷土料理が豊富なことは、言うまでもありません。「ひだみ」と、地元で呼ばれる「どんぐり」食。熊と競うように拾っては干し、灰汁を抜いた後、粉にして餅にしたり、あんこにしたり。飢饉の折の非常食として備えていたものが、今はかえって日常の楽しみとして食べると「こんなにおいしい」と、優しい味に癒されます。ほおば 朴葉餅に、朴葉寿司と、まだまだ続く郷土料理です。

比較的、東京に近い東信地方。こちらは鯉料理に、くるみがたくさん実る地方です。南北に長いからこそ、温暖な地方と雪深く寒い地方とを与えられている信州です。

長年、県内のいろいろな料理上手な方や生産者を訪ねては、教を乞うてきましたが、うかがう回数を重ねるごとに、地域食の深さをしみじみと実感します。どの地方も、地元にあるものの、自分が育てた食材を余すことなく使い、毎日食べるものから保存まで工夫し尽くして。決して、他の地のものまで欲しがらずに。これこそが「暮らしの宿る食」ですね。

ここで、私の正月料理を一、二、紹介しましょう。県内各地で教えていただいたものも加え、良いところ取りのお節せちになりました。

一つ目は、「いもなます」。野沢温泉村を中心とする料理で、野沢温泉では、冠婚葬祭には、必ず出されます。

二つ目は、「満腹塩丸いか」。塩丸いかは、海無し県では、全県的に使われます。細く切ったきゅうりやキャベツと酢の物にしますが、満腹いかにしたのは、私のオリジナルです。海の方から腹に塩を詰めて信州に運ばれ、到着時はすっかり発酵され、旨味が増しています。一年

中、県内のスーパーで求められる品です。後は、三種の祝い肴さかな、田づくり、ごぼう、黒豆、お屠蘇とそで新年を迎えます。どれもこれもデパートの豪華お節でなく、地元食らしく、自分らしく、が最大のおいしく祝う重詰めです。

先人たちが、どんなものを食して暮らしてきたかを探ることは、その地で生きる私たちと、未来に向けての道を示すものでもあります。海外の食を真似ることなく、健康と食文化を繋げることでもあるでしょう。

今年も、どうぞコロナ禍の無い、穏やかな一年でありますように。



横山家の正月料理

いもなます (野沢温泉村を中心とする料理)

■材料

- いも …… 400 グラム
- 酢 …… 大さじ 4
- 砂糖 …… 大さじ 2 と 1/2
- 塩 …… 小さじ 1/2
- 菜種油 …… 大さじ 1

■作り方

1. じゃがいもを千切りにして 15 分水につけ、一度、水を替え、しっかり水を切る。
2. 鍋に甘酢を加え、中火にかけ、じゃがいもに吸収させる。
3. バットに広げて冷まし、菜種油をかけ回す。



満腹塩丸いか

■材料

- 塩丸いか …… 3 杯
- 大根 …… 400 グラム
- にんじん …… 50 グラム
- 酢 …… 150cc
- 水 …… 200cc
- 砂糖 …… 大さじ 5
- 塩 …… 大さじ 1

■作り方

1. 塩丸いかを半日ほど、塩抜きする。大根、にんじんを千切りにして分量外の塩をふって水分をしぼる。
2. 塩丸いかの腹に大根、にんじんを詰め、甘酢に浸し、一晩おく。
3. 輪切りにしていただく。



川と人が描く未来図 大河津分水通水 100 周年・関屋分水通水 50 周年

今年、大河津分水通水から 100 年、関屋分水通水から 50 年を迎える。
改めて二つの分水路の役割、今後の川と人、川と都市のあり方等を北陸地方整備局の
今井誠信濃川河川事務所長、小川純子信濃川下流河川事務所長から伺った。

1. 信濃川には 3 つの河口がある

日本で最も長く、そして最も年間流出量の多い信濃川。越後平野はこの信濃川と、信濃川に次ぐ年間流出量を誇る阿賀野川等が運んだ土砂で作られた沖積平野である。特に長岡市より下流でほとんど勾配がなくなる信濃川は、自ら運んだ土砂に妨げられて有史以降もたびたび流路を変えており、水を求めて住み着いた人々にとって恵みであるとともに大きな厄害であった。

信濃川が平野部に入って最も日本海に近づく大河津から堀割を築き、洪水を日本海に流して平野部の水位を下げる—この計画は、1730（享保 15）年頃から起こり、そのたびに幕府から請願を却下されてきた。明治に入って 2 度の中止を経て、日露戦争勝利後の 1909（明治 42）年に工事再開、1922（大正 11）年に通水した。

この間、明治政府は信濃川の河身改修で水害を防ごうとしてきたが、1896（明治 29）年に信濃川中流部から越後平野全体が水没する大水害（「横田切れ」）が発生。政府は抜本的な対策、すなわち大河津分水路の建設が必要であるとして、再開された経緯があった。

地域住民の請願からは 292 年。私たちの祖先が何を願い、大河津分水路が何を变えたのか、国土に働きかける土木の役割を、改めて問う契機としたい。

本川河口、大河津分水路に続く 3 つ目の河口である関屋分水路は、昭和の始め、信濃川から運ばれてくる土砂によって新潟港の水深が浅くなり、船の行き来が難しくなると心配されたことから計画され、新潟市内で地盤沈下による浸水被害が目立つようになった高度成長期に計画が本格化し、1972（昭和 47）年に通水した。

本川河口から上流わずか 10km 地点に築かれた関屋分水路は、①信濃川の大量の水を分水路から直接海に流すことで新潟市等を水害から

守り②分水路と本川の流量を調節して海からの塩水の流入を防いだり、必要な用水を確保③多量の土砂を含んだ大量の水を分水路から流すことで、新潟西港への土砂堆積を抑制するとともに海岸侵食が進んでいた新潟市西海岸の侵食を防止するなどの役割を担っている。

地域は水害のみならず、排水不良により水が深く溜まる田んぼに悩まされていたため、関屋分水路の構想もまた江戸時代後期から何度もあった。関屋堀割町という名は、関屋分水路の開削で生まれた町名ではなく、新潟市西区の低湿地の水位を下げるために明治時代に築かれた堀割に由来している。

大河津分水路、関屋分水路、そして信濃川本川の 3 つの河口は、信濃川下流部が洪水の時は、大河津分水路が上流から流れてくる水量を全て日本海に流す。本川はその後中ノ口川と分流、刈谷田川、五十嵐川などが合流し、本川の信濃川水門で関屋分水路に流す水量を調節し、分担して日本海に流している。

下の図は 150 年に 1 回程度起こると予測される洪水時を想定した計画で、どの河口がどの程度までの水量を受け持つかを示した図だ。兩岸に新潟中心市街地が広がる信濃川本川が 1,000 m³/s で、関屋分水路はその 3 倍、大河津分水路は 11 倍もの排水を担っている。越後平野が、二つの分水路にどれほど守られているかが分かる。



河川整備基本方針における計画高水流量図

2. 一世紀と半世紀、二つの通水を記念して

昨年夏、「大河津分水通水 100 周年・関屋分水通水 50 周年記念 未来につながる事業実行委員会」（実行委員長＝中原八一新潟市長）が設立され、さまざまな記念事業が始まっている。



大河津分水通水 100 周年記念「恵弁当」新潟和牛しぐれ煮、イクラ、鮭など、大河津分水通水によって育まれた越後平野の農産物（食材）を盛り込んでいる。弁当箱の二次元バーコードからは大河津分水ができるまでを描いた動画「あの山を拓く」をみることができる。（燕市大河津分水通水100周年記念品開発支援事業）



令和3年度の燕大学（公民館教養講座）は大河津分水の建設に尽力した長善館の門下生にスポットを当て講義が行われた（燕市）



せきぶん治水歴史ウォーク

昨年8月には大河津分水路から下流の流域9市町村長が、川と治水の恵みに対しメッセージを揮毫した。このうち最下流の新潟市と最上流の長岡市は江戸時代信濃川舟運で結ばれ、新潟市中心市街地の古町地区が長岡藩領として整備され関係が深く、また2市の間の市町村も舟運が産業を支えて発展してきた。信濃川は、それぞれの地域ごとに異なった表情を見せ、地域

ごとに長い歴史文化を育んできたからこそ、同じ信濃川に対する各首長の言葉は異なる含蓄をみせている。

メモリアルイヤーの本番は今年である。コロナ禍ではあるが、イベント等も実施されており、詳しくはウェブサイトをご覧ください。



大河津分水100

検索



関屋分水
通水50周年

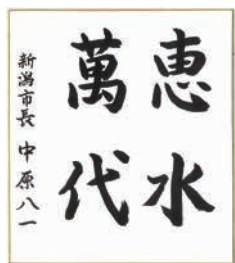
関屋分水50

検索

●新潟市長 中原八一 | けいすいばんだい

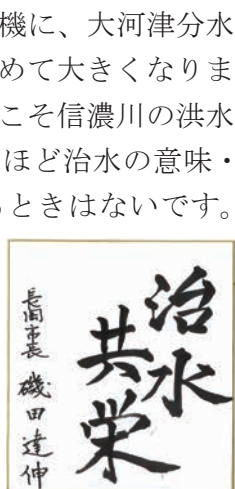
大河津分水と関屋分水の治水によって流域では安全が確保され、洪水などの災害をうけることなく、水に親しみ、水の恵みを受けて繁栄することができました。この豊かな環境が将来にわたって続いていってほしいという願いを込め「恵水萬代」としました。

日本一の大河信濃川の最下流部に位置する新潟市の「萬代橋」や「やすらぎ堤」などの水辺が、多くの方から親しまれているのは、治水のおかげであり感謝しています。



●長岡市長 磯田達伸 | ちすいきょうえい

令和元年の信濃川の洪水を機に、大河津分水の100年間の治水の意義は極めて大きくなりました。大河津分水があるからこそ信濃川の洪水を流すことができている、今ほど治水の意味・価値・役割が注目されているときはないです。一方で、長岡花火は信濃川のほとりで打ち上げることに意味があり、とても評価されています。治水と共に栄える地域・流域であってほしいという願いを込めました。



●三条市長 滝沢亮 | わでいがっすい

仏教の言葉で、自分の身を挺して・犠牲にして人を助けるという意味があります。まさしく大河津分水・関屋分水の存在こそが、自らを犠牲にして人を助けることの象徴だと感じます。4月の殉職者慰霊式や現在の大河津分水令和の大改修でも多くの方が携わり、尽力されていることを実感しました。そういった方々のおかげで私達の安心・安全が守られていることに感謝する意味でこの言葉を選びました。



●燕市長 鈴木力 | たいがひえん

大河津分水のおかげで越後平野が守られ、そのおかげで世界に冠たる産業の街燕市が発展してきました。これまでの大河津分水の役割に感謝しつつ、その恩恵を受けながら、これからも燕市は飛躍していきます、という意味を込めました。大河津分水の地元として、大河津分水がなければ燕の発展はなかったという思いで、未来を担う若い人たちも巻き込みながら周年事業に取り組んでいきたいと考えています。



●加茂市長 藤田明美 | めぐみのかわ

加茂市は信濃川が大きく蛇行するところに位置しています。信濃川が運んできた土砂が堆積し、肥沃な土壌を作り、新潟県内有数の果樹産地となっています。私自身も小さい頃から桃畑、リンゴ畑に収穫に向かう両親、祖父母の背中を見て育ってきました。時に川は脅威となるものがありますが、この豊かな土地、過去から続いている土地が未来にも続いてほしいと願い、この言葉を書きました。



●五泉市長 伊藤勝美 | かわは、だいちをうるおす

川は大地を潤し、土壌を豊かにしてくれます。五泉の特産品、さといも帛乙女(きぬおとめ)をはじめ、豊富な水と肥沃な大地に生み出される自然の恵みに感謝します。



●見附市長 久住時男(当時) | かわにまなぶ

危険だからと、川を背にして暮らしていた時代もありましたが、故郷は川によって暮らし・生活が成り立っており、自然環境を含めた豊かさや恵み、その反面の危険の両方を暮らしの中で実際に学ぶべきだと感じています。学ぶという観点で川は大きな力を持っています。先人が大河津分水や関屋分水を築いてくれた中で私達は生きている、その点を再度学びの原点にしていただきたいために、この言葉を選びました。



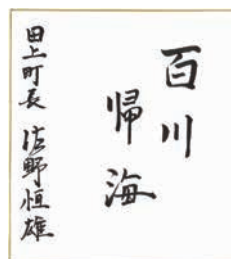
●弥彦村長 小林豊彦 | みらいのいしづえ

実行委員会のスローガンにもあるように、信濃と越後のこれからの豊かな未来を担保するのは大河津分水と関屋分水であるということから、この言葉を選びました。



●田上町長 佐野恒雄 | ひやくせんきかい

中国の淮南子という古典から引用しました。百川はあらゆるすべての川を指し示し、そのすべての川が海に注ぎ込むことから、多くの離れ離れになっているものが一か所に集まり、多くの人々の気持ちや考え方が一致することを意味します。



3. 大河津分水路 令和の大改修進行中！

大河津分水路は通水以来、幾多の洪水を日本海へと流し、信濃川下流域の洪水を最小限にするとともに、可動堰・洗堰による適正な分派によって利水機能が確保され、越後平野の発展の礎となってきた。しかし、分水路は上流に比べ河口部の川幅が狭く流下能力が不足しているほか、川底が削られるリスクや施設老朽化等さまざまな課題を有している。平成27年度よりその抜本的対策として河口部の川幅拡大や第二床固の改築等の分水路改修に着手し、令和14年度を目処に完了させる予定である。



大河津分水路河口部全景

大河津分水路は、河口付近に山地があるため川底が削られると、これと連なる山地部の地すべりを誘発しかねない。大河津分水路右岸の山地は、明治～大正の開削工事でも幾度も土砂崩れを起こし「化け物丁場」と呼ばれた地すべり地帯のため現在の形にとどめられた。分水路への流量を調節する自在堰が、川底が削られたために倒壊した1927（昭和2）年からの復旧に併せて川底を補強した第二床固が建設され、既に90年以上が経過している。自在堰倒壊時には信濃川本川にほとんど水が流れなくなり、下流で渇水や海水の逆流・遡上を引き起こしている。床固は膨大な水进行处理する大河津分水路にとって命綱とも言える存在だ。

2015（平成27）年から始まった大改修では、第二床固の改築、左岸山地部の掘削、野積橋の架け替えが同時並行で行われている。計画概要や工事の進捗が分かる「にとこみえ〜る館」は、タブレット端末によるVR・ARを用いて直感的な理解ができ、小学生の地域学習に人気のス

ポットとなっている。『ちょうどコロナ禍で遠くに行けないからというのもありましたが、われわれの想定以上に地元の子どもたちが大勢来てくれました』と今井事務所長は言う。



タブレットで将来の大河津分水路の姿を学習する子どもたち



「にとこみえ〜る館」で大河津分水路を学ぶ子どもたち

工事で最も大きな見せ場のひとつは、日本海を曳船し、大河津分水路の川底に設置する巨大な鋼殻ケーソン（鉄の箱）で、昨年までに2台運び、据え付けた。海が荒れれば運べず、増水期には設置できず、浚渫して船の通路を確保するため、タイミングを計るのが難しく、いつ運ばれてくるかは直前まで確定できないが、日々変化する現場の様子はまさに「世紀の大改修」であり、多くの人にご覧いただきたい。



巨大な鋼殻ケーソンの移動状況

4. 治水はいま「流域治水」へ

令和元年東日本台風は、全国で7万棟を超える浸水、99名の死者行方不明者を出す大災害となった。長野県の千曲川（信濃川上流）では堤防が決壊、新潟県側でも津南町から長岡市までの各地で被害が発生した。



令和元年東日本台風による洪水時の大河津分水路
(2019年10月13日)



令和元年東日本台風の際の信濃川最下流部
(2019年10月13日)

大河津分水路、関屋分水路に守られた本川最下流は普段とさほど変わらない穏やかな流れだったが、この時、大河津分水路は12時間にわたって氾濫危険水位を超え、周辺住民には避難指示が出されていた。『下流に被害がなかったのは結果であって、分水路が持ちこたえられるか紙一重だった。改めて安全は「絶対」じゃないと思い知った』と小川事務所長は言う。

一方、温暖化の影響で局地的な集中豪雨が急増している。2004年に見附市、三条市などで大きな被害を出した「7・13水害」は中越地方の

福島県境で大雨が降り、支川を通じて大河津分水路下流の信濃川に合流、溢水や堤防決壊が起こっている。どこで降るかによっても、地域の危険度は大きく異なってくる。

令和元年東日本台風の緊急治水対策が進められる一方で、流域のあらゆるリソースを活用した「流域治水」の取り組みが始まっている。



「流域治水」のイメージ

- ① 氾濫をできるだけ防ぐ、減らす対策
- ② 被害対象をできるだけ減らす対策
- ③ 被害をできるだけ軽く、速やかな復旧復興のための対策

を河川管理者だけでなく流域全体のあらゆる関係者が協働してハード・ソフト両面で多層的に推進

例えば昨年秋には発電や農業用水確保など、目的も管理者も異なるダムの管理者が、一堂に会して協議会を結成。大雨が想定される場合、貯められている水を事前放流し、その後の洪水をダムに貯められるようにする取り組みの準備を始めている。田んぼダムや流域の遊水地も重要なリソース。田んぼダムは大雨が降ったときに田んぼに一時的に水を貯めることで洪水被害を軽減するもので、新潟県内では多くの市町村で取り組みが進められている。



今井 誠

国土交通省北陸地方整備局
信濃川河川事務所長

2003年入省、北海道開発局、水管理・国土保全局河川計画課、同局河川環境課、在オーストラリア日本国大使館一等書記官などを経て2021年4月より現職



小川 純子

国土交通省北陸地方整備局
信濃川下流河川事務所長

2007年入省、水管理・国土保全局河川計画課、独立行政法人国際協力機構地球環境部、水管理・国土保全局海岸企画専門官などを経て2021年7月より現職

ソフト面では、身の回りの災害の危険を示す「水害ハザードマップ」に加え、「マイ・タイムライン」などの避難促進ツールが生まれてきている。

「マイ・タイムライン」は2015（平成27）年9月に20人の死者を出した関東・東北豪雨の後に作られた。河川の氾濫が起きる3～5日前からスタートして、何に注意し、どんな行動をすべきかを具体的に書き込んでいくものだ。地震と異なり豪雨災害は、一次情報から避難が必要になるまで3～5日の猶予がある。決して生命を落とさないように、という切なる願いが込められたものだ。また、水害ハザードマップについても、より高頻度の確率で発生する洪水における浸水リスク情報を充実し、住まい方、避難場所検討、まちづくりにも活かせるよう「水害リスクマップ」として改良するための検討が進められている。



ミズベリング信濃川やすらぎ堤は平成29年度から、「アウトドアと健康」をテーマに水辺の賑わいと経済効果の創出に取り組んでいる。夏の夜はビアガーデンなどの飲食店が並び賑わう。

5. 川とともに暮らし、まちをつくる

多くの恵みがあるからこそ、まちは川に寄り添うように生まれてきた。最下流の新潟市街には親水型堤防「やすらぎ堤」が整備され、市街地では得がたい大空間で信濃川の雄大な流れを

体感でき、アウトドアラウンジのミズベリングがまちづくりにも大きく貢献している。

三条市で「7・13水害」の後にできた防災ステーションにもミズベリング三条があり、スケートボードやバスケットボールなどができる。いざという時の避難場所が、平時は水害について学び・考える、市民の憩いの場となっている。



三条防災ステーション



ミズベリング三条
交流広場の芝生では、キャンプやバーベキューを楽しむことができる

小川事務所長は、日頃から川に親しむことが非常時にも役立つとし『信濃川をどう活用していきたいか、多少高めの球でもまずは投げてみてほしい』と地域の声に期待する。

今井事務所長は『千曲川が信濃川の長野県内での名称だということは知っていますよね。じゃあ犀川は？安全のために、川のことをもっと知ってほしい』と言う。

地図を眺め、自分の暮らす町の高低や、身近な川がどこをどう流れているか、川の水辺と河川敷の大空間でどんなことをしたいかなど、楽しみながら考えてみてほしい。

取材・執筆 橋本 啓子



伝統工芸再生と産業観光 ―越中福岡の菅笠の取り組みを中心に―

富山大学芸術文化学部 准教授 安嶋 是晴

1. はじめに

富山県には、高岡銅器や高岡漆器、井波彫刻、越中和紙、庄川挽物木地、そして越中福岡の菅笠すげがさの6品目が国（経済産業省）の伝統的工芸品の指定を受けており、その多くが富山県呉西地区に集中している。これはかつて高岡を治めていた加賀前田家の産業振興と関連があり、例えば高岡漆器や高岡銅器は、加賀前田家二代前田利長が1609（慶長14）年に高岡城に入城の際、農具や鍋、武具や箆たんす、膳など日常生活品を作らせるため職人を招へいしたことが起源とされる。また井波彫刻は、加賀前田家の「拝領地大工」の流れを汲む地元大工が、1763（宝暦13）年に焼失した瑞泉寺再建時、京都本願寺の御用彫刻師から技術指導を受けたことが専門的な彫物師を生む契機になったとされる。越中和紙（五箇山和紙）は天正年間（1573年～1592年）に加賀藩初代藩主前田利家に和紙を献上した記録があり、加賀藩の御料紙として使用されていた。庄川挽物木地は、加賀藩の用材調達の大集散地であった砺波市庄川町の貯木場の木材を利用し、1866（慶応2）年にろくろ挽物の木地屋を始めたことが起源とされる。そして越中福岡の菅笠は、副業的に生産されていた菅笠を1670（寛文10）年頃に加賀前田家五代前田綱紀が保護と奨励を進めることで産業化し、幕末には「加賀笠」の名前で全国的に評価されるほど成長している。

このように歴史や風土の中で受け継がれてきた呉西地区の伝統工芸品は、先人たちのたゆまぬ努力で技術を深化させ、いずれも加賀前田家との関わりで成長・発展を遂げてきた。しかし、多くの伝統工芸品は、高度経済成長期以降、

ライフスタイルの変化や新素材の開発などで需要が激減し、特にバブル崩壊後は衰退の一途を辿っている。はたして今後、伝統工芸に再生の道筋はあるのだろうか。

2. 富山の産業観光

伝統工芸の再生手法で昨今注目されるのは、産業観光である。JTB総合研究所の観光用語集によると、産業観光とは「その地域特有の産業に係るもの（工場、職人、製品など）、ならびに昔の工場跡や産業発祥の地など産業遺構を観光資源とする旅行」と定義しており、産業や企業のイメージアップや製品のPR、認知度の向上、地域振興などの効果が期待されている。

しかし、日本での産業観光は近年に始まったわけではない。1960年代以降、すでに産業観光の動きがあり、伝統工芸の工房や近代的な設備の工場が開放されるようになってきた。さらにターニングポイントは、2005（平成17）年に開催された愛知万博であり、先立つ2001（平成13）年の「産業観光サミット in 愛知・名古屋」では「産業観光推進宣言」が採択され、ものづくり現場を観光資源と位置付ける取り組みが全国で進展した。

実は富山県呉西地区には、伝統工芸の分野で、商品開発や産業観光で成功している企業がある。株式会社能作（www.nousaku.co.jp）は、元々は仏具製造を担っていたが、2001（平成13）年に錫の新商品を開発して以降、多くのヒット商品を生み出すとともに、2017（平成29）年には新社屋を移転し、工場見学や制作体験ができるスペース、カフェやショップを整備した。



株式会社能作での制作体験

この施設には年間約13万人が来場し、富山県内の観光地をつなぐハブ施設として、その効果が県内全域に波及するように工夫されている。成功の背景には、同業他社と競合しない戦略や、自社の利益のみではなく地域全体の利益を優先する共存共栄の戦略などがある。さらにその存在は、近隣事業所に外部効果を生み、有限会社モメンタムファクトリー Orii (www.mf-orii.co.jp) や有限会社シマタニ昇龍工房 (www.syouryu.co.jp) など、商品開発や産業観光で成果を上げる企業に好影響を与えてきた。この新しい取り組みは、利益を奪い合う「ゼロサムゲーム」ではなく、新しい市場を創出する「ポジティブサムゲーム」として、産地全体の相乗効果を生み出している。

3. 越中福岡の菅笠とは

ここから越中福岡の菅笠に焦点を当てる。私のゼミナールでは2019（令和元）年度と2020（令和2）年度「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業に採択され、越中福岡の菅笠の振興に尽力してきた（コロナ禍で1年延長し2021（令和3）年度も継続中）。そこで越中福岡の菅笠の概要を説明したのち、なぜこの伝統工芸品に着目したのか説明する。

越中福岡の菅笠の歴史は、江戸時代から始まる。前述の通り、前田綱紀による保護と奨励を受け、本格的な産業化が進み、その結果、明治時代には問屋が60戸、生産量は年間300万枚の一大産地となった。しかし需要が減少し、現在は問屋が3戸、生産量は3、4万枚程度となっている。また生産体制も2019（平成27）年1月

現在、菅栽培農家43戸で平均年齢78歳、笠骨職人1人（年齢87歳）、笠縫職人が71人で平均年齢81歳と高齢化が著しく、新たな担い手づくりが急務となっている。

一方で暗い話ばかりではない。2003（平成15）年には「福岡町の菅田」「菅干し」が、文化庁の指定する文化的景観の重要地域に選ばれ、2008（平成20）年には菅笠の「国の重要無形民俗文化財」指定、2013（平成25）年には「富山県伝統工芸品」の指定、2016（平成28）年には高岡の日本遺産構成要素に「越中福岡の菅笠製作技術」「菅笠問屋の町並み」の追加認証がなされている。そして2017（平成29）年には「国の伝統的工芸品」の指定を受けている。さらに歴代天皇即位の大嘗祭や、伊勢神宮式年遷宮の時には福岡の菅が使用されていることや、菅笠の生産量は全国シェアの9割を占めているが、こうした事実はあまり知られてはいない。

このように、越中福岡の菅笠には多くのポテンシャルがあるが、認知度の不足、需要の減少、担い手の不足で負のスパイラルに陥っている。こうしたスパイラルを逆回転させるにはどうすればよいか。あらゆる経営資源を効果的に活用することが必要である。産地の体制をはじめ、企業、行政、大学の産官学が協働し取り組みを進めていくことが求められる。幸いなことに富山県呉西地区には新商品開発や産業観光でモデルとなる伝統工芸品産業が存在し、さらに近隣に芸術系大学（本学）がある。未来へのストーリーを協同で描くことで伝統工芸の再生に寄与できるのではないかと。特に産業観光はその一つの手法となりうる。



学生が企画したモデルツアー

4. 菅笠活性化プロジェクトの取り組み

では具体的にゼミナールではどのようなことを行ってきたのか。字数に限りがあるため、産業観光に関連して取り組んだことを紹介する。

(1) 菅笠道場

2021（令和3）年度にはゼミナールの学生を対象に、菅笠づくりを体験する「菅笠道場」を実施した。



「菅笠道場」生産のすべてを体験

学生は12時間×2日間の計24時間かけて、笠骨づくりから笠縫までのすべての工程を体験した。誰に対し、どの程度の時間で、どのような体験アクティビティを組み立てるのかの検討が、これによって得られたデータにより可能になる。2019(令和元)年に6時間の笠縫体験を行ったが、これは製作工程のごく一部であり、完成までの時間を逆算し、体験講師があらかじめ作業を施していた。これではどの部分を体験とすべきかの検討が不可能である。長時間の作業は、学生たちにとって肉体的にも精神的にも辛いものであったが、本事業から10の体験アクティビティを構築することができた。

(2) 菅笠モデルツアー

2019（令和元）年度には、モデルツアーを企画・実施した。ここでは①菅笠を被って散策し、景観との融合を図ること、②呉西地区に点在する工芸体験を行うこと、③呉西地区の潜在的な観光資源を掘り起こすことの3つの観点からモデルツアーを企画した。

例えば、高岡市の伝統的建造物群保存地区である山町筋や金屋町や、世界遺産の五箇山相倉



「菅笠モデルツアー」（瑞泉寺門前町）

合掌造り集落、瑞泉寺門前町を菅笠を被って散策する、ツアーの行程で呉西地区の伝統工芸の体験を組み入れる、事前に菅笠産地の街歩きやヒアリングを行い、表出化した菅笠ゆかりの古民家を宿泊施設として活用（掘り起こし）する、など3つの観点を取り入れてツアーを実施した。結果として、5のモデルコースを構築した。

(3) 菅笠コンペ

2019（令和元）年度には菅笠のデザインコンペを実施した。菅笠や菅を活かした新商品開発のアイデアを大学内で募集し、約70の企画案を集め、菅笠の関係者やデザイナーが審査を行い、実現可能な提案は越中福岡の菅笠振興会が商品化を担った。また2021（令和3）年度には、富山大学芸術文化学部、高岡工芸高校の学生を対象に、ボール紙製の菅笠に絵やデザインを描くコンペを予定している。



デザインコンペイメージ（菅笠作家 中山煌雲）

応募作品は展示を行うとともに、デザインをデジタルデータとして取り組み、プロジェクトマップとして投影する予定である。これによってデザイン性の高い菅笠の開発を期待している。

(4) 菅笠展示会

2021(令和3)年度には、三井アウトレットパーク北陸小矢部にて菅笠の展示会を実施した。

「伝統的な菅笠」「現代的な菅笠」「革新的な菅笠」など過去・現在・未来を感じさせる多様な菅笠を展示した。会場では、制作実演や体験などのワークショップも実施し、多くの来場者に菅笠の存在を認識させる機会となった。



過去・現在・未来の菅笠の展示と実演



(5) 菅笠生産支援

2019年度には、菅田の見学、2020年度には菅植え、2021年度には菅刈り・菅干しの協力を行った。そして先述の菅笠道場では、自分たちが菅刈り・菅干しをしたものを原材料として使用している。学生たちにとっては、生産者に寄り添い、交流を通じて産地の現状をリアルに感じる貴重な機会にもなった。



学生の菅生産支援
(上) 菅刈り
(右) 菅干し



5. おわりに

本稿では、富山県の伝統工芸を中心に、伝統工芸の再生と産業観光について論じてきた。たしかに産業観光は有効なツールであるが、留意すべき点もある。

最初に、本業が維持できなければ、産業観光も成立しないということである。越中福岡の菅笠は、職人の高齢化が進んでおり、また低賃金体質という課題を抱えている。需要も減少している。産業観光は一つの処方箋ではあるが、全体を改善する特効薬ではない。まずは本業の確立が不可欠である。

もう一つは、産業観光による負担と受益をどう配分するかということである。産業観光の効果は産地や地域に波及するが、短期的には事業者の負担が起こる。したがって誰が負担をしてどこに便益をもたらすのか全体を設計することが必要である。

こうしたリスクを取る精神、便益を囲い込まないオープンなマインド、良好な関係を維持するネットワークなどが重要であり、これらをコーディネートする人材が不可欠である。したがって大学の持つ役割は重要であり、継続して事業に取り組んでいく。

やすじま ゆきはる ◆安嶋 是晴氏略歴



富山県出身。富山大学経済学部卒業後、民間企業、ふくい県民活動センター（現ふくい県民活動・ボランティアセンター）、輪島商工会議所勤務を経て、2008年金沢大学経済学部（現経済学類）助教。2016年9月より現職。博士（経済学）



金沢がSDGsで目指す「責任ある観光」とは

1. 金沢SDGs「金沢ミライシナリオ」

金沢市は北陸新幹線が開通した2015年に観光客が1,000万人を超え、2019年までに1,067万人へ伸長した。これまで北陸新幹線開業に向けてまちづくりを進めてきた金沢市は、都市の持続可能性に舵を切り、2019年3月に金沢市、金沢青年会議所、国連大学の3者でSDGs共同宣言。そして2030年の金沢のあるべき姿を共創するための「金沢ミライシナリオ」を作成、市民とさまざまな関係者がともに2030年の金沢に向けてまちづくりに取り組んでいる。金沢ミライシナリオには、5つの方向性があり、

- ①古くて新しい心地よいまち
- ②“もったいない”がないまち
- ③子供がゆめを描けるまち
- ④働きがいも、生きがいも得られるまち
- ⑤新しいもの、ことを生み出すまち

それぞれに実現するには何が必要か、そのために各自が取り組めることは何か、市民一人ひとりや組織が自分ごととして取り組めるような工夫がなされている。

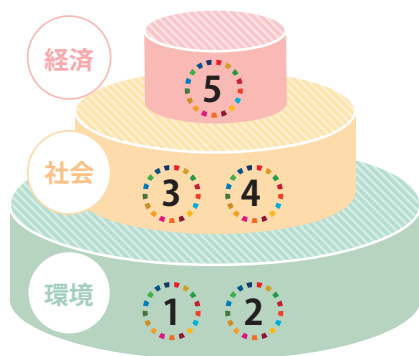


ながい みきこ
永井 三岐子

国連大学 サステナビリティ高等研究所
いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット
(UNU-IAS OUIK)事務局長。UNU-IAS OUIKは石川県、金沢市と、東京に本部を置く国連大学が共同設置運営するユニットで、2008年から金沢市を拠点に石川県全域で活動。里山、里海や都市の文化的景観など自然と人間の関係に焦点をあてた生物文化多様性を軸に研究活動を展開。JICA モンゴル事務所企画調査員、国連大学グローバル環境情報センター (GEIC) などを経て2014年より現職。現在は研究と政策提言の統合を軸にマネジメントに携わる。

金沢ミライシナリオの「5つの方向性」は、環境、社会、経済の3側面から将来を構想している。その取り組みの土台となる①は「自然、歴史、文化に立脚したまちづくりをすすめる」だ。

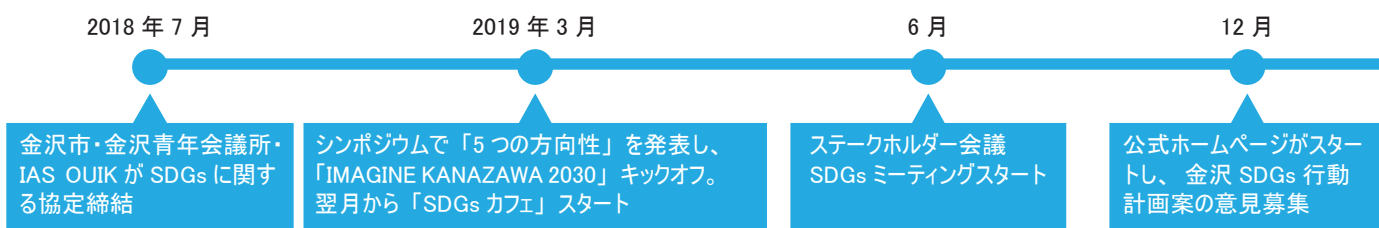
金沢市はその基本構想で1985年から「国際的文化産業都市」たることを宣言しており、2009年にはユネスコ創造都市（クラフト）に認定。特にSDGs先進地のヨーロッパ諸都市と交流を重ねてきた。そして北陸新幹線金沢開業により2015年から観光客は年間1,000万人を突破。



17 パートナシップで目標を達成しよう
5つの方向性に基づき
さまざまな人や組織と
協働で取り組みます。

- 1 自然、歴史、文化に立脚したまちづくりをすすめる 
- 2 環境への負荷を少なくし資源循環型社会をつくる  
- 3 次代を担う子供たちの可能性を引き出す環境をつくる  
- 4 誰もが生涯にわたって学び活躍できる社会風土をつくる  
- 5 文化や産業に革新的イノベーションが起きる仕組みをつくる 

■ 金沢SDGsの道のり



交流人口が拡大するなか、課題も明らかになってきた。そこで金沢市は2020年、消費型観光から交流型観光への転換を目指すとともに、観光を金沢市のSDGs（環境・社会・経済の3側面）の中心に据えてSDGs推進を牽引しながら、同時に観光面における課題解決も図る戦略を立てた。この取り組みは同年内閣府の自治体SDGsモデル事業に採択されている。



2. 北陸新幹線開業で見た「金沢らしさ」

2020年はコロナ禍で急減したものの、北陸新幹線延伸以来金沢市は「金沢独り勝ち」といわれるほどの活況を呈した。

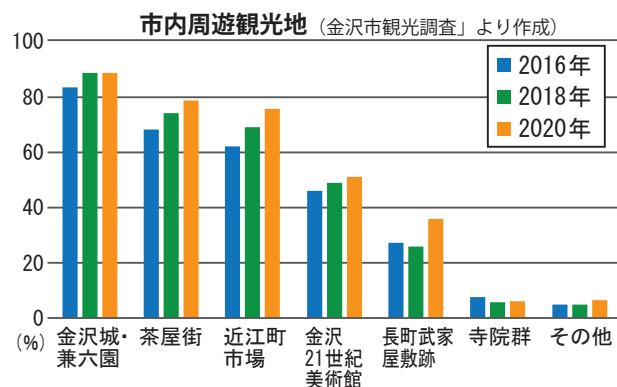
金沢市は2016年から市内主要観光施設で観光客からの聞き取りにより調査（金沢市観光調査）を継続している。これによると、観光客の8割以上は金沢城・兼六園を訪れ、次いで茶屋街、近江町市場、そして5割が金沢21世紀美術館となっている。上記はいずれもJR金沢駅から2km圏内にあり、主要観光地へ集中する傾向は年ごとに高まっている。宿泊地も金沢市内のホテル使用がおよそ8割を占め、0泊と1泊が7割以上。一極集中の「コンパクトな観光地」と化していた。

一気に増えた人流は「市民生活と摩擦を起こした」と永井事務局長は言う。バスなど市街交通の混雑だけでなく、従来から観光スポットであると同時に市民の台所でもあった近江町市場では観光客向けの品揃えにシフトするなどの変化が起こった。

「金沢城、兼六園、茶屋街を見て近江町市場で食事をして、金沢ってコンパクトな観光地だよねと。しかしそれで『金沢を旅した』と言えるのか」と永井事務局長。

金沢が持つ他都市との違いは、藩政期から続き市民が支えてきた歴史文化。「茶の湯には茶室、お道具、庭園など、茶会を開くために多くのものが必要で、全て地元でまかなえるのは金沢と京都くらいです。1泊2日でコンパクトに回れる観光地になってしまったら単に「消費」するだけで、金沢が誇るべきものに接点を持ってもらえない」と話す。

市では、茶の湯、能、金箔貼りや友禅など多彩な体験メニューを整え、教育旅行だけではなく、より多くの観光客に向けアピールしている。



金沢SDGsの詳細、現在の活動は「IMAGINE KANAZAWA 2030 推進会議」のホームページをご覧ください。
<https://kanazawa-sdgs.jp/>

2020年3月

6月

2021年

SDGs 行動計画である「金沢ミライシナリオ」完成

多様な主体が連携する推進組織「IMAGINE KANAZAWA 2030 推進会議」設置。7月、SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業に選定。

先導的取組を公募し補助金を交付してトライ

3. 金沢SDGsツーリズムを発信

金沢市は2021年、2025年度までの観光振興推進計画を策定、金沢市の観光が目指す姿を具体化し、数値目標を掲げた。

この中で観光事業者を対象にSDGsの先導的取り組みを募集し、補助率2/3、50万円以内の補助事業を行っている。

いしかわ・かなざわオペレーティングユニットでは、これらのひとつ「日本庭園ワークショップ」に協力した。市民、外国人も含む観光客がともに地域の日本庭園を整備しながら学び合うもの。「デンマークでは地域コミュニティの日常の食事会に観光客が混じる姿が普通に見られ、地域の生活文化自体が観光コンテンツであるという考え方はヨーロッパでは一般的。その土地に暮らすように旅をしたいというニーズは世界的に高まっており、特に欧米からの観光客からは、その地域の持続可能性が考慮されているツアーが支持される」と永井事務局長は言う。



昨年行われた庭園ワークショップの様子

トライを重ね、検証していくと同時に情報発信のあり方やマネタイズの方法など課題は多いが、「暮らすように旅をしたい」観光客(=責任ある観光客)と交流することをきっかけとして地域の文化を再認識し持続可能性に貢献する、これが金沢SDGsのエンジンだ。いしかわ・かなざわオペレーティングユニットでは2019年から誰でも参加できるSDGsカフェを開催し、未来のありようを「自分ごと」にするための対話を継続している。観光客にも人気の金沢21世紀美術館は、現代アートを通じた市民活動の拠点にもなっており「現代アートは、いま起こっていることを自分ごとにする力がある」と永井事務局長はSDGs推進に向けた市民力向上、情報発信のパートナーとして大きな期待を寄せる。

2年に渡ったコロナ禍の出口はまだ明らかではないが、永井事務局長によれば金沢市街の観光客は少しずつ戻ってきているという。しかし「すべてを元に戻すのではなく、これを機会に、より未来のためにbuild back betterを目指したい。新型コロナウイルスの流行で在宅勤務が進み、旅行からワーケーション、その先に移住定住という、これまでになかったグラデーションができた。暮らすような旅ができるように、何度も来たくなるまちになるために、それぞれが現状の努力プラスアルファ(=地域貢献)を目指して、いまが知恵の絞りどころ」と結んだ。

取材・執筆 橋本 啓子

金沢の観光がめざす姿

「ほんもの」を継承し、世界をひきつけるまち

旅行者のほんものへの感度の向上や金沢の文化や市民生活に敬意を払っていただくための機運の醸成に向けた施策を積極的に展開し、旅行者の満足度と市民の幸福度を共に高める「質の観光」をさらに進めます。

訪れるたび感動があり、長くいるほど興行きを感じるまち

金沢の多様で豊かな自然は、市民生活を彩り、繊細な美意識を醸成してきました。恵まれた自然環境を活かし、また歴史と風土に根差しながら、訪れるたびに新しい発見がある金沢、長く滞在するほど知的好奇心が満たされる金沢をめざします。

住む人と訪れる人が価値を共創するまち

金沢の自然・文化や市民生活を尊重し、旅先での意識や行動に責任を持つ旅行者と、足元にある地域資源を見直し、旅行者に親近感を持つ市民が新たな関係性を築き、金沢が大切にしてきた文化や暮らしの価値を、市民と旅行者がともに高めていくことをめざします。

新たな観光マネジメントをリードするまち

関係自治体と連携を強化して新たな広域観光・周遊観光を創造するとともに、デジタル技術の活用により、働き方、生き方の変容にも対応し、ヒューマンスケールな新たな観光マネジメントの形を金沢から発信していきます。

| 指標 | 令和元年(2019年) | 令和7年(2025年) |
|---------------|-------------|-------------|
| 年間宿泊者数 | 343.1万人 | 377.7万人 |
| 年間外国人宿泊者数 | 61.3万人 | 82.1万人 |
| 観光入込客数(金沢地域) | 1,068万人 | 1,101万人 |
| 金沢旅行の満足度(日本人) | 92.8% | 95%以上 |
| 金沢旅行の満足度(外国人) | 97.4% | 95%以上維持 |

[図] 金沢市持続可能な観光振興推進計画2021より抜粋

北陸・冬を彩るイルミネーション

冬の澄んだ空気は、イルミネーションを美しく輝かせ、幻想的な景色を演出します。寒さを忘れ写真を撮りたくなるスポットに出かけてみませんか。

宗教改革運動で有名なルターが、クリスマスイブの礼拝の帰り、森で樹の枝の間に輝く星の美しさに感動し、家に戻り、木の枝にロウソクをくくり火を灯し星の様子を再現したのがイルミネーションの起源だと言われています。これがドイツの諸都市に普及し、やがてヨーロッパ各地に広がり、20世紀初頭にドイツ移民によってアメリカにもたらされました。そして、エジソンが白熱電球の研究・開発を進め、研究所の周りを白熱電球で飾り付けたのが、世界初の電球でのイルミネーションとされています。

日本にイルミネーションが登場したのは1900(明治33)年に、神戸沖で行われた観艦式です。

その後大阪や東京の博覧会会場がイルミネーションで飾られ、やがて銀座の『明治屋』がクリスマスイルミネーションを点灯するようになり、たくさんの人が押し寄せたそうです。

平成に入り、各地でイルミネーションを楽しむようになり冬の風物詩となっています。LEDの登場で、幻想的な青・白の光が加わり、東日本大震災の節電を契機に、長寿命・高性能・地球に優しいに配慮しLEDを使ったイルミネーションが主流となり、イベントの規模が大きく、期間が延長されるようになりました。

2021NIIGATA 光のページェント

■JR新潟駅南口 けやき通り (新潟県新潟市)

34回目を迎え新潟の冬の風物詩となっています。「未来を担う子供たちに大きな夢を与えよう」をテーマに開催されます。200本ほどのケヤキが約26万個のLEDで彩られ、鮮やかな光の世界が出現します。

【期間】12月3日(金)～1月31日(月)

【ライトアップ時間】17:00～24:30

【問い合わせ】NIIGATA 光のページェント実行委員会事務局
(新潟市南商工振興会) TEL.025-282-7108



街路樹イルミネーション

■見附市役所前とおり (新潟県見附市)

16年目となる市民手づくりのイルミネーションの全長は県内最長の約1.3km。街路樹の電球は、市民ボランティアが中心となって取り付けられ、設置費用の一部も市民の寄付金が充てられています。市民の想いがつまった光がまちを明るく照らします。

【期間】11月21日(日)～2月14日(月)

【ライトアップ時間】17:00～22:00

【問い合わせ】街路樹イルミネーション実行委員会事務局
(見附市役所建設課内) TEL.0258-62-1700



環水公園スイートイルミネーション 2021

■富山県富岩運河環水公園 (富山県富山市)

公園のシンボルである天門橋と泉と滝の広場が、約3万個のLEDでライトアップされます。円形の水盤に設置された白く輝くツリーを周囲から中心に流れ落ちる「光の滝」が装飾します。

【期間】10月9日(土)～2月28日(月)

【ライトアップ時間】日没～22:00

【問い合わせ】富山県観光振興室コンベンション・賑わい創出課賑わい創出担当 TEL.076-444-4116



イルミネーション・in・ひみ

■湊川 中の橋周辺（富山県氷見市）

今回のテーマは、コロナ終息と明るい未来を願って“キボウノヒカリ”。約3万8千球のさわやかな白色やあたたかみのあるオレンジ色の輝きがコロナ禍でうつむきがちな皆さんの心に希望の光となって届きますように。かわいいキャラクターのモチーフも設置しています。

【期間】11月19日（金）～2月28日（月）

【ライトアップ時間】日没～23:00

【問い合わせ】イルミネーション・in・ひみ推進協議会
（氷見商工会議所） TEL.0766-74-1200



香林坊地区ツリーファンタジー

■国道157号香林坊ラモーダ～香林坊交差点間（石川県金沢市）

今年で35年目を迎える金沢の冬の風物詩です。歩道約250mの両側のケヤキ36本が11万個の電球で飾られ、通り全体が鮮やかなイルミネーションに包まれます。昨年に続いて、「雪吊り」をイメージし、木の幹や枝にシャンパンゴールド色、雪吊り部分に白色のLEDで彩られたイルミネーションが2本あります。

【期間】11月1日（月）～2月20日（日）

【ライトアップ時間】17:00～24:00

【問い合わせ】香林坊地区ツリーファンタジー実行委員会
TEL.076-220-5001



輪島・白米千枚田あぜのきらめき

■国道249号沿い 白米千枚田（石川県輪島市）

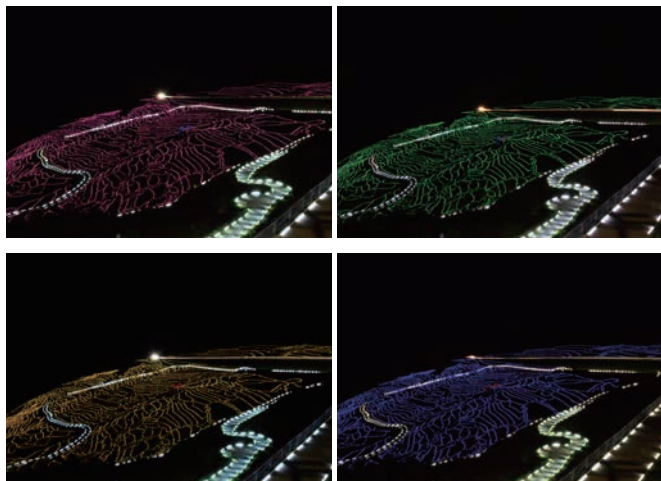
約4ヘクタールの土地に1,004枚もの棚田が広がる風景は、「世界農業遺産」に指定されている能登の里山を象徴する風景です。この棚田のあぜ道を、2万5千個のソーラーLEDで彩る「あぜのきらめき」は「日本夜景遺産」に認定されている人気のイベントです。日が暮れて辺りが暗くなるにつれて、ピンク→グリーン→ゴールド→ブルーへと15分ごとにゆっくり変わりながら灯り、夜の千枚田を彩ります。

使用するLED装置は通称「ペットボトル」と呼ばれ、地元企業と協力して独自開発された独立型太陽光発電LED。昼間の太陽光エネルギーで充電、暗くなると自動でペットボトルが発光するしくみになっています。ペットボトルは「はたるびと」と呼ばれる多くのボランティアが設置しています。

【期間】10月23日（土）～3月13日（日）

【ライトアップ時間】日没から4時間（19～20時が見頃）

【問い合わせ】白米千枚田景勝保存実行委員会
（輪島市産業部観光課） TEL.0768-23-1146 [写真提供] 輪島市



善光寺表参道イルミネーション

■長野駅前から善光寺まで（長野県長野市）

長野駅から善光寺までの表参道（全長1.8km）の並木を、約41万個のLED電球で彩ります。悠久の歴史を持つ善光寺と華やかなイルミネーションのコラボレーションは、未来へと渡す光を紡ぎます。

【期間】11月23日（火・祝）～2月13日（日）

【ライトアップ時間】17:00～22:00

【問い合わせ】善光寺表参道イルミネーション実行委員会事務局
（長野市観光振興課 インバウンド・国際室） TEL.026-224-8316



※『ウォーカープラス』の「イルミネーションガイド2021」を参考に、発行日に点灯されているイルミネーションを事務局で編集、紹介しました。



会員だより

「令和3年秋の叙勲」で受章された7名の方からご寄稿いただきました。
心からお祝い申し上げます。

瑞宝中綬章

柳川 城二氏

(東京都板橋区在住)

元北陸地方整備局
局長



ダム事業に誇りと期待

令和3年秋の叙勲に際し、受章の栄に浴することができました。これもひとえに諸先輩をはじめ、一緒に仕事をさせていただいた多くの皆様方のご指導、ご鞭撻の賜と心から感謝申し上げます。

北陸地方整備局には平成17年4月から平成18年7月まで局長として勤務させていただきました。

私が着任した前年の平成16年10月に中越地震があり、その復旧・復興対策が大きな課題でしたが、本局並びに関係事務所の皆さんの精力的な活躍により順調に対策を進めることができ、新潟県や関係市町村の皆さんから高い評価と感謝をいただきました。北陸地方整備局の総合力のすばらしさを実感しました。

平成17年12月から翌年にかけて、気象庁が「平成18年豪雪」と命名した大変な豪雪に見舞われました。平成17年12月22日から23日にかけて日本海から吹きこんだ湿った雪が碓子に絡みついて漏電を引き起こし、最大で65万戸に達する「新潟大停電」が発生しました。市内の信号機が停電で止まって、交通渋滞を引き起こしましたが、整備局から自家発の発電機を貸出し、対応させていただきました。

平成18年1月に国会の災害対策特別委員会の先生方が視察に訪れたので随行させていただきました。津南町と長野県の栄村に行きましたが、気象台の測候所がある津南町の豪雪状況が連日、テレビで報道されていました。栄村に行っ

たときに村長さんが津南町ばかり報道されているけど本当はこちらのほうがもっと大変なのだと愚痴を言っていたのが記憶に残っています。

北陸地方整備局は平成18年1月から現在の美咲合同庁舎に移転したので、私は白山と美咲の両方の庁舎で勤務させていただきました。

北陸の管内を飛び回っていたのがつい昨日のように思われますが、月日の速さを実感しています。

私は、国交省の現役時代は、今はなくなった河川局開発課に永年勤務したほか、昭和56年4月から昭和58年11月まで東北地方整備局の玉川ダム工事事務所の調査設計課長、平成3年の5月から平成6年の5月まで関東地方整備局の八ツ場ダム工事事務所の所長を務めさせていただき、ダムの仕事に多く携わりました。

八ツ場ダムでは用地交渉に明け暮れる日々でしたが、着任後1年2か月で用地補償調査の立入り協定を締結することができ、事業の進展に貢献できたことを誇りに思っています。

令和元年の台風19号では試験湛水中の八ツ場ダムが7,500万 m^3 の洪水を貯留して利根川の洪水被害を防ぐことができました。現地に対応に当たっていた八ツ場ダム職員の皆さんは大変だったと後で聞きましたが、所長時代の苦勞が報われたように思いました。

ここ数年、気象条件の激化により毎年のように厳しい水害・土砂災害に見舞われています。

国交省では流域対策も含めた流域治水の推進を進めていますが、ダムによる洪水調節が今後とも大きな役割を果たすものと期待しています。

瑞宝中綬章

佐藤 直樹 氏（東京都板橋区在住）
元北陸地方整備局 次長

新しい人生のスタート、そして挑戦へ

このたび令和3年秋の叙勲に際して、はからずも瑞宝中綬章の栄に浴し、身に余る光栄に存じます。これもひとえに、諸先輩をはじめとする多くの皆様方の永年にわたるご指導・ご支援の賜物と心から深く感謝申し上げます。

北陸地方整備局では平成15年4月から17年3月までの短い期間でしたが、河川・道路・港湾・都市等幅広く事業に係ることができ、充実した2年間でした。忘れられないのは平成16年10月に発生した中越地震への整備局の対応です。山古志村（現長岡市）を中心に多くの個所で斜面崩壊や地滑りが起こり、芋川流域での河道閉塞等の発生、そしてトンネル・橋梁の損傷や路面の崩壊・陥没のため道路が寸断され、冬を迎える地域の生活の安全・安心が喫緊の課題となりました。雪が降る前に何とかしてインフラの応急復旧を終える必要となり、当時の地整職員の皆さんの協力で様々な工事が手際よく進められ、大みそかまで作業してもらいました。無事終えることができました。感謝です。

国道291号の権限代行も記憶に残っています。当時の新しい県知事さんのもとに伺い、了解をいただきました。また、国道17号の路面崩壊地区で緊急迂回路設置のために家屋を切り取る必要があり、その家屋に避難していた被災者の了解を得たことも思い出します。

もうひとつの思い出は仕事からは離れますが、私は北海道の出身ですが、父方が富山県、母方が新潟県の出身であったことから、ルーツを探して訪れることができました。新潟に勤務できて良かったことのひとつです。

さて、私の近況ですが、32年間の国交省、6年間の社団、そして9年間の民間舗装会社の勤めを終えて、これからは支えてくれた妻への孝行・恩返しを考えていたところでしたが、昨年健康診断で肺がん（ステージ1）が見つかり、コロナ禍での手術そして抗がん剤投与のための入院と約半年間闘病生活を送りました。健康でいられることが、どれほど大切かということを感じ知らされました。今は3か月に一度の病院通いで、経過観察中ですが、現在はすこぶる元気になりました。ただ、回復したとはいえ、これまで必ず年に一度実施してきた海外旅行がコロナのため行けずにあります。ドイツを中心に片言の英語と独語で回る欧州旅行を楽しみにしていました。来年こそはおいしいビールを飲みに行ければいいなと思っております。

さて、「人生七十古来稀なり」の時代から「人生百年」の時代になってきております。このたびの受章を「新しい人生のスタート」ととらえ、新しいことにも挑戦していきたいと考えております。今後とも引き続きご指導のほどよろしくお願いいたします。

末筆となりますが、皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。



スイス・ユングフラウヨッホにて

瑞宝小綬章

熊谷 清氏（東京都町田市在住）

元北陸地方建設局 千曲川工事事務所長

「ほくりく」信濃川・千曲川流域に暮らした10年のとき

令和3年秋の叙勲に際し、はからずも瑞宝小綬章受章の荣誉に浴しました。

これもひとえに、長年にわたって皆様から頂きましたご支援ご懇情の賜と深く感謝申し上げます。

公務員生活のスタートは、昭和48年、北陸地方建設局信濃川下流工事事務所調査設計課（昭和48～50年）である。秋に、オイルショックが発生。前年に関屋分水路通水、翌年の昭和49年に流量改定により現川下流に1000m/sが配分された。局電算で水理計算し、信濃川水門の径間数また中ノロ川分派点のゲートタイプを検討した。治水経済調査では、等流計算により想定氾濫域を設定した。

中流部、信濃川工事事務所（昭和55～56年）では、調査課長。小出改修は、引堤用地の取得に向けまちづくりが石黒用地課長を中心に検討され、調査関係は付け替え道路の設計を進めていた。柳生橋右岸取り付けでは、路面高が上がり住戸へのアプローチが下ることにお叱りを受けた。同行の小林計画係長の柔らかな対応に助けられた。

国鉄信濃川発電所の増設では、逆調節について信濃川工事局平野課長と協議した。長岡国道の村江調査課長からは、国道17号小千谷バイパス橋梁を妙見堰に乗せる申し出があった。所長は酒井さんである。道路線形の制約から堰軸を下流に移し三者共同の事業方向が定まった。

上流の千曲川工事事務所（平成3～6年）は、所長で赴任した。家族帯同、小学生をかしらの子供たちとの長野の生活は楽しかった。

立ヶ花下流の無堤地区の築堤、善光寺平の堤防強化がおもな事業であった。平成3年6月、長野オリンピックの招致が決まり、県内の高速道路、新幹線ほかの建設が急ピッチとなった。

在任期間中に、昭和18年の千曲川一期改修竣工から50周年を迎えた。シンポジウム、記念誌発刊、源流から河口までのカヌー漕航（陸上ロジ隊長は細田開発調査課長）、改修起工碑

補修、式典などの記念行事に地元自治体と事務所全体で取り組んだ。

県、市、公団に意匠、デザインを統一した神田川水門の周辺整備を呼びかけ、道路公団の藤田所長は統一感をもって排水機場、松代SAを整備し、長野市に出向の高野技監からポット苗による植栽の提案があった。白石調査課長が推進役であった。

道路公団の長崎所長の骨折りにより、小布施橋下流右岸、立ヶ花までの堤防と高速道路盛土間の凹地が土砂充填された。堤防が強化され、その平地面は小布施町出身、日本花の会事務局長の岩井さんの植樹指導を受け2km程続く里ザクラの並木となった。対岸、豊野堤防は熊井係長に苦勞をかけ、裏法を平ブロック（ロータスユニ）で被覆し強化を図った。

小市橋上流の川中島サイフォンの保護ブロックによる河積阻害は、農政部長に直談判し、酒井局長が来県の折に現地を案内し、県上層部にダメを押ししていただいた。

平成5年7月の洪水で梓川堤防が欠け込み、玉石張り、木工沈床根固め、巨石水制による災害復旧工事を行った。基準類が十分でないなか、塚田工務係長をはじめ工務関係者に苦勞をかけた。本郷松本出張所長が10余の工事現場を東ね、統一の取れた出来栄えに仕上がった。

企画部（昭和56年～60年）では「明日の北陸を考える懇談会」の事務局を担当した。公共事業の推進に向けて、経済界の参加も必要であるとの局長の考えがあった。

昭和48年に建設省に入省して以来33年余、北陸地方建設局には1/3に当たる10年余、信濃川水系の3河川事務所、企画部に勤務した。

諸先輩からのご指導「世のため、人のため」を旨としてまいりました。職場を共にした皆様には、無理難題を申し上げたことあるかと思えます。未だ発展途上の未熟さ故と、ご容赦いただければ幸いです。

皆様のご健勝、ご多幸をお祈りし、お礼の言葉といたします。ありがとうございました。



「でいらぼっちゃん」と共に
（室山アグリパーク・安曇野市 2019年4月）

瑞宝小綬章

中山 隆氏（東京都杉並区在住）
元北陸地方建設局 河川部長

ワンイヤーンワカマツ

このたび、令和3年秋の叙勲に際しまして、受章の栄に浴することができました。皆様のこれまでのご指導、ご支援の賜物でありこの紙面をお借りして感謝申し上げます。

昭和50年に建設省に採用されましたが、北陸では阿賀川工事事務所と本局河川部にお世話になりました。勤務年数は東北の方が長いのですが、北陸とは節目を感じさせるつながりがあります。

楽しかった三重県での2年間の出向期間が明けて、昭和52年に津市から、新任地である福島県会津若松市へ向かいました。「福島県は東北でしょ」と今考えると素人の疑問を抱きつつ、「猪苗代湖と白鳥、会津磐梯山、白虎隊」にも胸が躍りました。

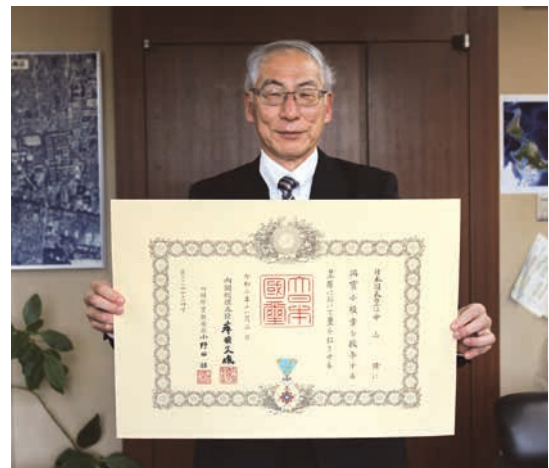
阿賀川工事事務所（志水茂明所長）は、当時大川ダムの河床部の掘削工事と、今では定着した感があるRCD工法の検討がスタートしたばかりでした。ダム工事現場の経験がない私は、技術的な内容いわゆるサブの仕事は竹村公太郎開発調査課長の懇切丁寧な指導を受け、地質資料整理、利水計算、地元説明資料作成等に留まらず、会議や現地調査のセットというロジの仕事も担当しました。RCD工法は中国地建の島地川ダムでも検討中の一大テーマであり、北陸地建本局、本省河川局開発課、土木研究所、本体JV、国土センター等から有識者の来訪が相次ぎ、有意義な話を聞く機会に恵まれ、その後の人脈形成にもつながりました。特に、本省河川局開発課の廣瀬利雄室長から直接現地案内の礼状を頂いて大変感激した記憶があります。

開発調査係長であった私は、同じ係の木村繁技官と公私にわたり行動を共にすることが一番多くありました。同じ独身寮（城西寮）から事務所へ通い、鶴ヶ城周辺をジョギングで汗を流

して、時には登山、スキー、ボウリング、麻雀等で息抜きもしました。彼の計らいで、休日に大川ダム建設で沈む桑原地区の現地調査に出かけたことがあります。水泳もあまり得意でない私は、自分の身長よりかなり深い淵に怯みましたが、「今後は阿賀川のこの地点で泳ぐことが出来ない」と思うと感慨もひとしおでした。水泳の後、桑原地区の自治会長の三浦佐久馬さん（故人）が、我々を地元の川魚でもてなしてくれました。三浦さんは地権者会の代表をされており、大川ダムの記録映画にも出て頂きました。木村さんは、翌年の昭和53年に三浦さんの娘の幹子さんとゴールインしました。私も同じ年に結婚しました。

結婚直後、私は本省河川局防災課へ転勤になり、その後は東北勤務と出向が長く続き、2回目の北陸勤務は平成12（昭和75）年になります。空白期間が、75-53=22年と長く、1回目勤務でお世話になった方の多くが退職されていました。東北では、ヒューマンネットワークに支えられて仕事がやれただけに、もう少し早ければとの思いがあります。2回目も1年弱と大変短い勤務であり、清津川ダムの事業評価、宇奈月ダムと出平ダムの連携排砂等の多くの懸案事項を後任の関克己河川部長に託して、国土交通省発足の年である平成13年に国土交通大学校へ転勤しました。

結びにあたり、会員の皆様方のご活躍・ご健勝を心から祈念致します。



国土交通大学校にて

瑞宝小綬章

松浦 利映 氏 (新潟県新潟市在住)

北陸地方整備局 総務部 総括調整官

忘れてはならない記憶

この度、令和3年秋の叙勲に際しまして、はからずも、瑞宝小綬章の栄に浴し、身に余る光栄に存じます。

これもひとえに、皆様の長年にわたる心温かいご指導、ご支援の賜と深く感謝申し上げます。

顧みますと、私は事務官として昭和45年から約40年間、新潟、富山、石川と山形の4県、本局そして8事務所で総務・会計・契約の仕事を中心に道路・河川行政にも携わらせていただきました。

在職時の記憶として、2年連続で防災官庁である北陸地方整備局と富山河川国道事務所の庁舎移転に、メンバーの一人として直接関わったことも挙げられますが、やはり「災害対応」ではないかと思っています。

特に、平成16年の中越地震では、被災直後に大規模な調査を実施するため、より近い場所で現地対策本部を設置することになり、場所の選定、調査に必要な機器や物資の調達、現地で災害対策本部を直接サポートし、無事調査が終了したことが思い出されます。

更に、平成23年の東日本大震災では、東北地整へ「自己完結型」のテックフォースを送り出す際は、行ったことがない場所で三度の食事や宿泊場所の確保、テックフォース車両の給油に長蛇の列で「給油できない」、「給油するスタンドがない」などトラブルの連続を総務班一丸となって遠隔操作したことも思い出されます。

その他にも災害対応がありますが、自分の生き方を変えた出来事もありました。それは昭和52年の新潟国道工事事務所で発生した一般国道49号三川村地先の「谷花道路欠壊」での対応です。

災害が発生し、仮復旧後に全止めから車種規制に切り替え、規制すべき長距離トラックを止める際に、運転手から「規制看板は無かった」、「ここから郡山に戻って113号で新潟に行くことは死活問題だ」と詰め寄られ、押し問答になりました。

郡山から災害箇所までの規制看板は、主要交差点毎に、自分が指示して設置していたので自信をもって説得し、運転手は相当激怒していましたが、最終的には引き返して行きました。

後から気が付きましたが、自分が着ていた作業服の下のアンダーシャツはつかみかかられてズタズタに裂けていました。

「通せ」、「通せない」の押し問答の最中、一瞬、「ここから逃げたい」と甘い考えが頭をよぎったことです。

一瞬でも、その場から逃げたいと思ったことは、忘れられないことであり、忘れてはならない「自分を戒める」できごとと、今でも記憶が残っています。

現在、地元の町内会長を引き受け、「安心・安全な明るい住みやすい街づくり」に微力ではありますが、今までの経験を生かしていきたいと思っております。

引き続き、ご指導・ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願いいたします。

改めて、皆様に心から感謝とお礼のご挨拶とさせていただきます。



孫との一コマ

瑞宝双光章

布施 勝義 氏（新潟県新潟市在住）

元北陸地方建設局 阿賀川工事事務所長

数々の思い出を胸に、今後も国土強靱化に尽力

この度、令和3年秋の叙勲に際し、図らずも瑞宝双光章の榮譽に浴し、身に余る光栄と感激しております。

これもひとえに、上司や先輩、同僚の皆様方の暖かいご指導、ご支援、ご鞭撻のたまものと感謝申し上げます。

昭和38年に富山工事に入省し、2年目の6月16日に新潟地震が発生しました。本復旧工事の応援隊として富山と金沢工事から各々2名ずつを阿賀野川に派遣されることとなり、私もその1人として新潟へ向かいました。

私に与えられた最初の仕事は、左岸側の最下流部、新潟空港前面の築堤護岸の設計書作成でした。「現場説明」の日程が決まっており、その目標に向かって作業を進めることになりましたが、富山工事では雑務経験のみで設計書作成手順も分からない中での作業の連続でした。周りの先輩方も私に教えてくれる余裕は無く、更に追加された2本の設計書も同時に進めることになり、3ヵ月で500時間以上の超過勤務を経験しました。本局との打合せが済んで事務所に帰る時、日付が変わっている事も度々ありましたが、事務官の皆様や、周りの人に助けをもらい無事、「現場説明」を乗り切る事ができました。

災害復旧工事も順調に進み、目処が着いた昭和41年1月からは、流量改訂を担当いたしました。降雨資料の収集から始まり、単位図法による流出解析を行うため毎日毎日計算の連続で、成果が出るたび本省打合せが行われ、指摘された課題解決のため作業を実施するという事を繰り返した後、工事実施基本計画（案）が策定され、その一環として大川ダム（当時は舟子ダム）が計画されました。

息つく間もなく、今度は加治川水害に見舞われ、次の年には羽越水害が発生しました。これらの教訓も合わせ、阿賀野川右岸の内水対策を策定することになり、福島潟放水路や新発田川放水路を含む治水計画が「阿賀野川右岸恒久的治水対策」として決定され、現在も鋭意工事中ですが、その近くを通る度に当時のことが懐かしく思い出されます。

在職39年間でしたが、本局勤務が3回で延べ5年間。残りは事務所勤務でしたが、直接現場を巡ったり、地域の住民と対話したり、交渉することが出来て、有意義で楽しく仕事をする事が出来ました。

その反面、「新潟県河川敷地擁護同盟」や「青木湖の水位低下問題」等では非常に厳しい局面もありました。

新潟地震の災害復旧の応援に始まり、最後はダムの爆破予告の対応まで数々の思い出を作ることが出来ました。今後は、社業を通じて国土強靱化に寄与したいと考えていますので、皆様方のさらなる、ご支援、ご協力、ご鞭撻をお願いします。



大好きなやすらぎ堤をバックに（令和3年11月）

瑞宝双光章

両角 和重 氏 (長野県松本市在住)

元北陸地方整備局 地方事業評価管理官

このすばらしい出会いは人生の宝物

令和3年秋の叙勲で思いがけなく瑞宝双光章の栄に浴しました。

これもひとえに建設省、国土交通省での勤務を通じて巡り会えた上司、先輩そして同僚の皆様方のお力添えの賜と心から感謝申し上げます。

受章に際し、大変多くの皆様からお祝いのお言葉をいただき、ますますこの受章の重さを感じ身の引き締まる思いであります。授章のお知らせを受けての晩、母親(99歳)と昔を思いながらビールをもう一本追加し、ささやかにお互いをねぎらいあいました。

昭和38年の春、土木研究所のダム構造研究室に採用となり、舟木一夫の「高校三年生」に送られ、詰襟の学生服を着て夜行列車で上京したことを記憶しています。

昭和46年に千曲川工事事務所に転勤となり、大町ダムの予備調査に携わりました。翌年、実施計画調査移行とともに旧大町市民病院の取り壊し直前の一角をお借りして開設した調査事務所に移り、今は亡き笠井所長以下14人のスタッフで実施計画調査業務がスタートしました。仕事もそしていろいろなレクリエーションも、何をやるにも事務所全員で、非常に家庭的な雰囲気で行ったことが忘れられません。

まずはダムの座取りを決めるため、笠井所長や土木研究所指導のもと、岩検ハンマーとクリノメーターを腰に地質屋さんやダムサイトの試掘横坑に入り、岩級区分や断層などを地質図に書き込む作業に没頭しました。その後もダム本体の形を最終的に決定するために必要な調査横坑、試掘ボーリング、弾性波探査、岩盤試験などを追加してダム軸、掘削線が決まり、昭和52年からダムの基礎掘削が始まりました。

昭和54年、本体コンクリート打設の直前に本局河川計画課に転勤が決まり、後ろ髪を引かれる思いで大町を後にしました。大町での7年間は北陸地建で初めて携わった仕事の第一歩であり鮮明な記憶として残っています。

その後、本省海岸課、長岡国道、河川工事課阿賀川工事事務所、企画部とそれぞれの部署で貴重な経験をさせていただきました。そして役所生活39年を振り返ってみると、自らつけた足跡が見当たらないのであります。私がぬかるみに入りかけると上司、同僚の皆さんが手取り足取り引っ張り出してくれたのです。こうした皆さんとの出会いは私の人生の宝物であります。改めて皆様にお礼を申し上げます。

近況を少し述べます。15アールほどの水田と家の周りの畑で愛用のトラクターに乗り、米と野菜作りに汗を流しています。これも体力維持のためのスポーツジムならぬ「農作業ジム」と思い前向きに取り組んでいます。今後も健康に留意しながら精進していきたいと思っていますので、引き続きお付き合いの程よろしく願い申し上げます。ありがとうございました。





愛用のトラクターで「農作業ジム」に出発！

※官職は北陸地方建設局・整備局在職時のものです。

伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間を見つけ、ぜひお立寄りください。

| イベント名 | 期 日 | 開催地・会場 | 内 容 | 問合せ先 |
|--|--|---|---|---|
| 建設技術報告会  | 1月12日(水) ▼ 1月25日(火) ※土日除く | WEB配信 ▶視聴には事前申込 が必要です | 【報告テーマ】① i-constructionによる生産性向上、インフラ分野のDX ②社会資本の的確な維持管理・更新 ③雪に強い地域づくり④自然災害からの安全確保⑤環境の保全と創造 | 実行委員会事務局 (北陸技術事務所内) TEL:025-231-1281 |
| ゆきみらい2022 in白山  | 1月27日(木) ▼ 1月28日(金) | 石川県白山市 ●松任文化会館ピーノ ●白山郷公園 | シンポジウム、研究発表会、見本市、 除雪機械展示・実演会 ▶シンポジウム、研究発表会は、 事前申込が必要です | 実行委員会事務局 (北陸地方整備局内) TEL:025-370-6687 |
| 第25回 社会資本整備セミナー | 1月19日(水) 13:30～16:00 1月20日(木) 9:30～12:00 1月21日(金) 13:00～15:30 2月9日(水) 13:30～16:00 | ポルファートとやま 定員100名 締め切りました 石川県地場産業 振興センター 定員85名 長野ターミナル会館 定員40名 新潟県自治会館 定員80名 締め切りました | 講演① 「最近の国土交通行政の取り組みについて」 講師:北陸地方整備局 担当官 講演② 「DX時代に突入したこれからの建設業」 講師:松尾 泰晴氏(yasstyle 代表) ▶聴講には事前申込が必要です 【新潟会場】1社1名 【富山・石川・長野会場】1社2名 | 社会資本整備セミナー 事務局 (北陸地域づくり協会 企画事業部) TEL:025-381-1882 FAX:025-383-1205 締切:1月12日(水) ※定員に達し次第、 締め切らせて頂きます |

※都合により変更になる場合がございます。事前にお確かめの上、お出かけください。

第27回 「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

締切 令和4年1月31日 日 月

詳細は、協会ホームページのトップページ「お知らせ」2021年11月30日をご覧ください。

| 助成事業名 | 助成対象 | 助成金 | 助成予定数 | 審査 |
|-----------------------|------------------------------|-------------------------|-------|---------------------|
| 地域づくり研究事業 技術開発支援事業 | 大学・企業・法人任意団体・ 個人またはこれらの団体 | 20～50万円 (概算払1/2まで) | 15件 | 書類選考 |
| 技術開発共同研究 | 大学もしくは高専を含む 2つ以上の機関 | 200～300万円 (概算払1/2まで) | 2件 | 書類選考 プレゼンテーション選考 |

※助成数は増減することがあります。

募集集中!
ご応募をお待ちしています

編集後記

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。
今号は、信濃川を管理されている今井事務所長、小川事務所長、金沢SDGsの永井事務局長からお話を伺った。今井氏から信濃川は平野部、河岸段丘等いろいろな現場があり、そこで繰り広げられた歴史がおもしろいとお聞きし、改めて自然、歴史は重なり合い地域の文化を織りなす個性を育てていると感じた。また、小川氏の地域の声を受けとめたい、永井氏の2030年で金沢SDGsが終わるわけではなく、どちらも常に対話し方向性をつくっていくプロセスを大事にしたいという。その地域「らしさ」の根底にある歴史・文化を共有し、未来を考え、将来像を描き、その間にある課題を解決するために話し合う場を整え、一人ひとりの地域への想いを高めていくことが、持続可能なまちづくりの第一歩だと思った。通水100年、50年関連のイベント等が予定されている。参加し、川をとおして地域を再認識してみよう。(事務局)



(一社)北陸地域づくり協会は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています

地域づくり in ほくりく 第27号

発行 令和4年1月7日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025)381-1160
FAX (025)383-1205
HP: http://www2.hokurikutei.or.jp